2011.08.08

北欧ヴィンテージファブリックの魅力満載のフェア、開催中！

担当：Rica

今回は、ちまたで人気のヴィンテージファブリックのお話です。
幼い頃からのアンティーク好きがこうじて、今ではめっきりオリジナルの作風がノスタルジックなアンティーク風を彷彿とさせるものが多くなり、今ものの生地でも少し時代感を思わせるアンティーク風の生地を追い求める様になりました。

新しい年代の物ではスウェーデンの６０年代プリント。スウェーデンはテキスタイルが盛んで、６０年代はスウェーデンのテキスタイル黄金時代といえます。今ものでも見受けられる大柄デザインの原点はこの頃に出来たといえます。

スウェーデン西南部のBorås(ボロース)という町はテキスタイルで有名でな町です。今でも多くのテキスタイル会社がボロースに点在していますが日々縮小の道を辿っているようです。日本では珍しいハンドプリントの会社もスウェーデンには数多く見受けられます。デザインから完成まで20近くの工程を踏みます。高価なのは当然ですよね。

所変わってアメリカの1930-1960年代のフィードサックの生地はキルト作家の間で大人気といえます。フィードサックとは家畜の肥料を入れる為に作られた肥料袋。元々はロゴをプリントしただけのシンプルな物だったのが、1929年の世界大恐慌後、不景気になり女性達がフィードサックを利用してリサイクルで洋服やキルトなど身のまわりの物を作り出したのがきっかけとなり、メーカー側が女性達に好まれるように素敵なプリント生地で、カラフルで魅力的なフィードサックを作ったのが始まりです。

アメリカの1950年代前後のプリントは、やはりファッションの黄金時代ということもあり可憐で可愛いものが多いです。
またその頃、Chintz(チンツー)加工を施した生地が多く生産されており、パコッとしたシルエットを出すのに適した加工といえます。チンツー加工とは綿織物を糊付けした後、カレンダ掛けにして強い光沢を出す加工。私はダントツこれが好きでチンツー加工の生地には目がないです。

時々手に取るのが1930-1960年代のジャーマンファブリック。イギリスのヴィンテージファブリックを思わせるような少し繊細なモチーフが多いです。

とはいえ、日本の織物産業も負けてはいません。銀座にあるカワムラシルクオリジナルの昔に生産されたシルク織物はイッカを思わせるような美しい織物です。イッカとは日本で言う絣（かすり）のようなもので、柄それぞれの為に糸を変えます。海外のものと違い、日本の織物は繊細すぎるほど繊細なんですね。手間ひまがかかり、当然こちらも高価です。

左上／チンツー加工、５０年代アメリカ、中上／４０年代フランス、右上／チンツー加工、５０年代アメリカ、左下／５０年代アメリカ、中下／５０年代アメリカ、右下／３０年代ドイツ

今回紹介致しました生地はすべてROSENKRONA(ローゼンクローナ)により商品加工され、8/6から8/16まで西武池袋本店7階で行われる『暮らしの中の骨董マーケット』でご覧頂けます。興味のある方は是非、足を運んで頂ければと思います。

詳しくは西武池袋本店ホームページをご覧下さいませ。
http://www2.seibu.jp/ikebukuro/

WRITER PROFILE
Rica
ファッションデザイナー。ジュンアシダのデザイナーを経て代官山でオートクチュールのドレスサロン経営。のちにマルタ共和国→シシリア島...と北へ北へと移り住み、現在スウェーデン在住。2009年夏より、オリジナルブランド『Rosenkrona』を立ち上げ、北欧と日本で活動中（www.rosenkrona.com）。各国の手工芸、アンティーク、アルゼンチンタンゴ、ワイン＆食、秘境の町＆村めぐりなど興味は広範囲。